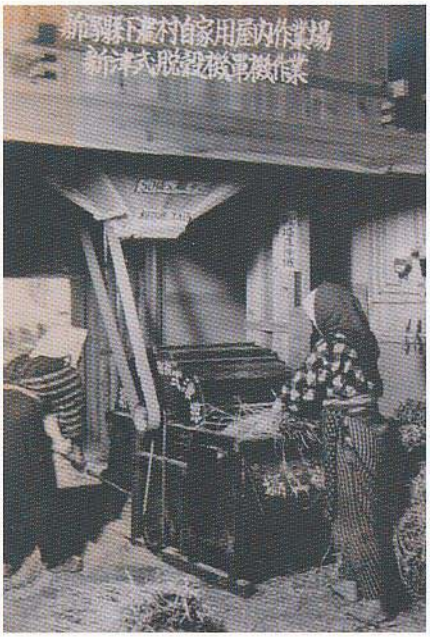
日本海政令市にいがた
水と土の芸術祭
Niigata Water and Land Art Festival 2009

平成21年度 企画展

蒲原平野(かんばらへいや)の20世紀

――水と土の近代――

みなとぴあ
新潟市歴史博物館
NIIGATA CITY HISTORY MUSEUM



みなとぴあ
新潟市歴史博物館
NIIGATA CITY HISTORY MUSEUM

〒951-8013　新潟市中央区柳島町2-10
TEL：025-225-6111
URL：http://www.nchm.jp　E-mail：museum@nchm.jp

動力脱穀機

新潟県の農機具メーカーは、戦中～戦後直後の動力脱穀機の普及期に規模を拡大し、昭和20年代後半には全国の生産量の半分を作っていたといわれています。動力脱穀機を製造していた県内の農機具メーカーは、小池村など江戸時代から農具を製作していた地域もありますが、回転式脱穀機が普及し始めた大正期前後に創業した会社が多いようです。土地改良事業が進み、農業の土地生産性が上がっていく時期に、メーカーも生産台数も伸びていったことがうかがわれます。

写真 7-1　新津式動力脱穀機（当館蔵）

吉徳農機は、新潟市秋葉区(旧新津市)の農機具メーカー。1915(大正4)年に創業。初代の吉田富治氏は下扱き式の脱穀機を開発するなど、脱穀機の機械化に大きな貢献をした。

写真 7-2　吉徳農機の動力脱穀機を使った農作業（新潟市巻郷土資料館蔵）

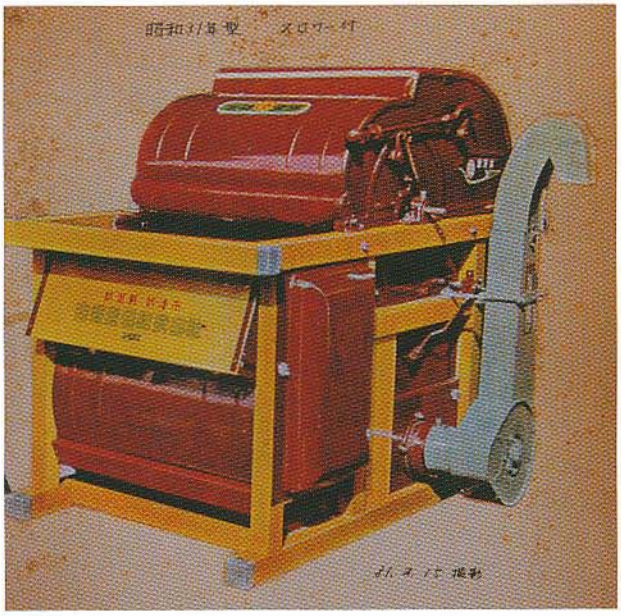


写真 7-3　新津式動力脱穀機のイラスト（吉徳農機提供）

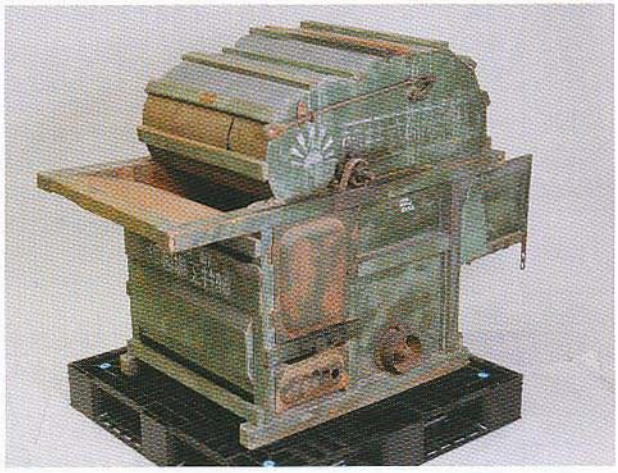


写真 7-4　藤井式動力脱穀機（新潟市豊栄博物館蔵）

藤井農機は、「脱穀機の村」と呼ばれた小池(燕市)の農機具メーカー。1915(大正4)年に足踏み脱穀機、手回し脱穀機などを、1929(昭和4)年に動力脱穀機の製造販売をはじめた。1990(平成2)年社名をフジイコーポレーションとし、農機具で培った技術を活かして除雪機など多方面の機械を製造している。

自動脱穀機

動力脱穀機は、稲束を手でもって作業しなければならないため、効率化に限界がありました。稲束を自動的に送り込む自動送込装置を取り付けた自動脱穀機は、技術的には戦前期に開発されていましたが、本格的に普及し始めたのは戦後からでした。

自動脱穀機は、乾燥前の稲束を脱穀することができるため、「生脱(なまだつ)(生脱穀機の略)」とも呼ばれました。同時期に普及した籾の平型通風乾燥機などとともに、蒲原平野の湿田の象徴でもあるハサ木を不要なものとしました。

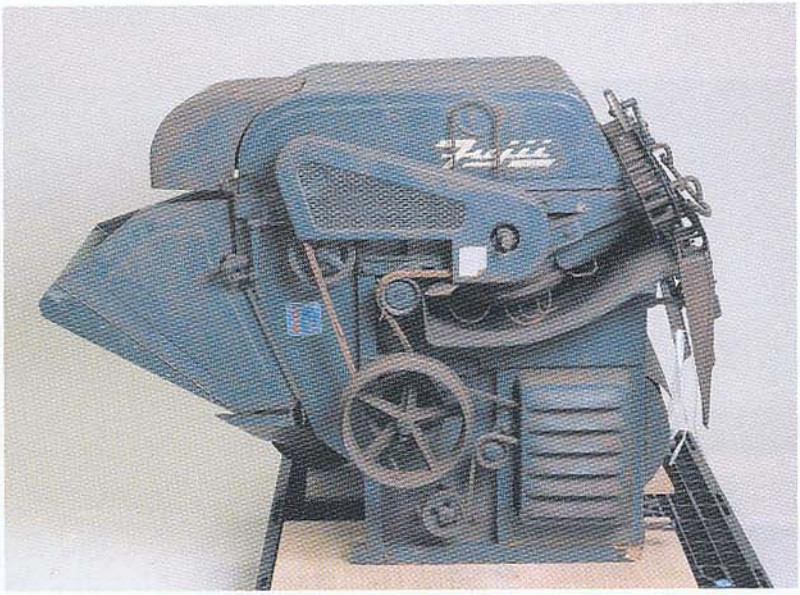


写真 7-5　藤井式自動脱穀機（フジイコーポレーション蔵）

FS-9フジイ全自動送込脱穀機。チェーンを利用した稲束の送り込み装置がついている。

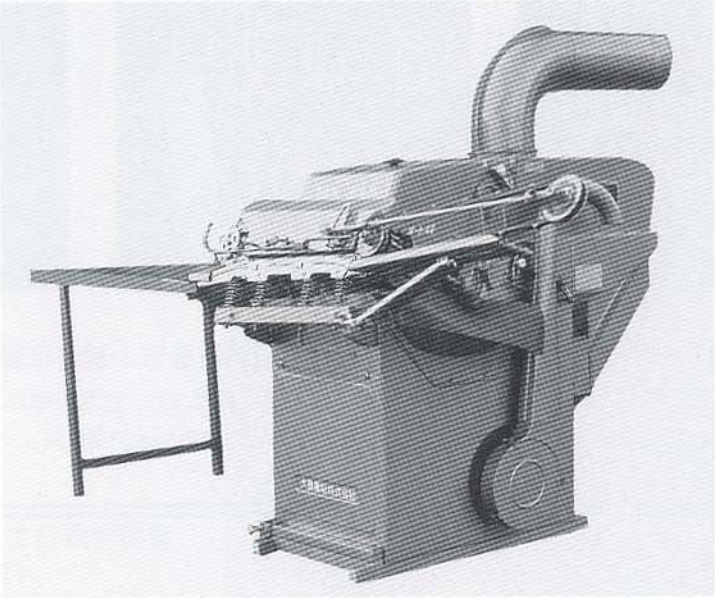


写真 7-6　大島式自動脱穀機（大島農機蔵）

大島農機は1917(大正6)年創業の上越市高田の農機具メーカー。新潟県を代表する農機具メーカーの一つである。